NO. 19
September '95
KWIS newsletter
神戸女学院大学
女性学
インスティチュート

女性学インスティチュート 設立11年目をむかえて

10年一昔というけれど……

別府恵子

今年の8月15日は第二次世界大戦後50回目の終戦記念日。その記念すべき年の年頭、阪神間に居住する者にとっては終戦記念日より以上の大事件、決して忘れられない天変地異、阪神大震災が発生した。地震発生直後、テレビや新聞に載った神戸市長田区や三宮界隈の報道写真は、皮肉にも、阪神間一帯が終戦当時50年前にタイムスリップしたかと錯覚させるものだった。大地震からすでに半年、夏に入って復興工事もいよいよ本格的になってきた。時は人の思惑をよそに厳然と過酷に過ぎていく。だが、そうした時間の流れのなかで、人はある節目ごとに立ち止まり、現在を思い、未来を展望して過去を振り返るものらしい。

本学に、大学研究所附属の研究機関として女性学インスティチュートが設立されて今年で、すでに満10年。振り返れば、外部からの要請で設立された女性学インスティチュートではあったが、10年一昔、大学の歴史と共に着実に時を刻んできたといえる。

インスティチュート設立とともに本学はＡＷＩ（the Asian Women's Institute）に加盟したわけだが、1991年秋には、ＡＷＩ加盟13校からの代表者を迎えて、「テクノロジー時代における女性と環境」というテーマで開催された第7回国際会議の会場校としての責任を果たしたのである。折しも、本学では家政学部を改組して、新学部人間科学部人間科学科（人間行動科学、人間環境科学の二専攻）開設申請の最中のことだった。その人間科学部も1997年3月には最初の卒業生を送る予定だ。

さらに、ＡＷＩ国際会議の開催校を引き受けたことの波及効果として、是非挙げておきたいことが二つ。一つは、本学の教職員や学生の意識のなかに、アジアに対する新たな関心を誘発させたこと。その後、インスティチュート主催の講演会の講師には、東南アジア関係の専門家を迎えることが多くなった。また、本学の卒業生（あるいは在学生）でアジア諸国でボランティア活動をしている者も少なからず存在することが分かったのである。アジア諸国との協調は、今後さらに、ＡＷＩの「教員・学生交換プログラム」をとおして、推進していかなくてはならない課題である。

もう一つは、前述の国際会議のテーマ、「テクノロジー時代における女性と環境」が、私たちの環境問題に対する認識を強くしてくれたこと。暖冬、冷夏（？）などの異常気象は地球の環境破壊が元凶といわれる昨今、自然破壊、環境汚染は放置しておけない深刻な問題である。科学者や行政だけに任せておくわけにはいかない。私たちの自然環境、岡田山の緑を守ることは、私たちが行動を起こすことから始めなければならないだろう。その小さな一歩が、ＡＷＩ国際会議の裏方として関わった学生たちの提唱によって始められた、「やぎの会」だ。女性学インスティチュートを拠点にした有志の学生たちによる古紙のリサイクル運動である。1992年に発足した「やぎの会」のメンバーの地道な活動は、少しずつ活動の輪を広げながら現在も続いている。たかが古紙のリサイクルと侮ることは決して出来ないのである。環境問題は「地球規模で考え、自然環境保護は身近なことから」始まるのだから。

10年一昔。その間、研究所附属機関として設立された女性学インスティチュートも、3代のディレクターの采配のもと、インスティチュートのアイデンティティが確立し、神戸女学院大学女性学インスティチュートならではの独自の企画と活動を続けてきたことを明記しておきたい。特に、現在のディレクターの尽力で、女性学インスティチュートの諸規程が整理され制定されたことは、機関の運営をより円滑にしている。また、ブルーの色調もさわやかな女性学インスティチュートのパンフレットの発行は、インスティチュートの存在と活動の宣伝に大いに役立っていよう。

最後に、女性学インスティチュート設立以来、運営委員ならびにメンバーたちの念願だった「女性学講座」の開設が、10周年を期にやっと実現する運びとなり、来年度のカリキュラムに組まれる予定であることを報告してキーの打ち止めとしたい。10年一昔といっても、長くもありまた短い時間。しかし、この10年の歳月、女性学インスティチュートも本学における様々な変化と関わりながら、その物語―[hi] story―を書いてきているのである。次の10年には、「女性学講座」が、あらたな核となって女性学インスティチュートの研究活動をさらに発展させてくれるだろう。

（大学研究所長、英文学科教授）

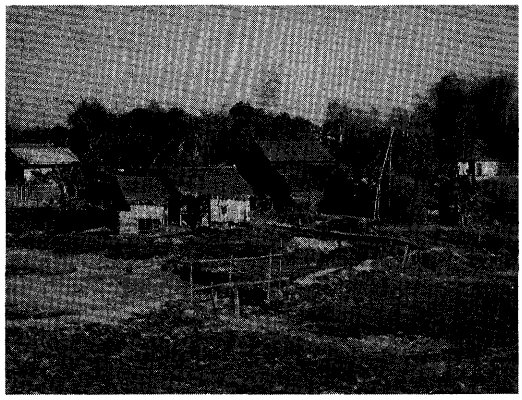
新たなる「発展」～ミャンマーの子ども達～

南　出　和　余

"Future belongs to the youth. The youth must have the courage to dream, to do and die for a true democratic world where all people may live in peace and prosperity. Passion with patience for democracy is most vital today."

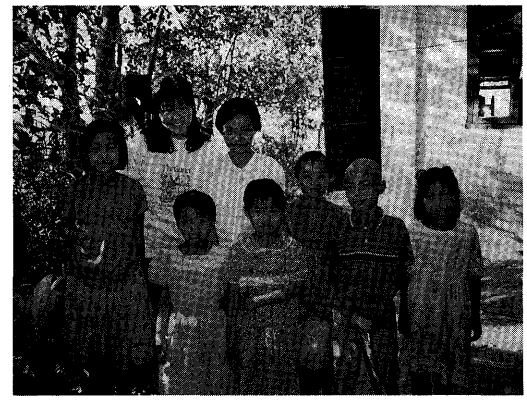
先日民主化運動指導者アウン・サン・スー・チー女史の軟禁解放で話題を呼んだミャンマー。私はその解放のちょうど半年前、青年交流キャンプ参加を目的にその地を訪れた。このキャンプは、両国の青年が生活を共にし、主として日本とミャンマーの現状や青年の役割についてのレクチャーを受け、皆でディスカッションを行うというものであった。上記の文は、その時にミャンマーの講師から青年に対して送られたものである。軍事政権の下、あらゆる自由を奪われ、抑圧を強いられているミャンマーの人々にとって民主化こそが「発展」の根元なのだと言う。このキャンプを通じて私は「発展」の意義を改めて考えさせられた。

ある日の夕方のことだった。私達が泊まっていたホテルの前に、5・6歳位の小さな男の子が、まだ生まれたばかりの赤ん坊を抱いて立っている。そして私達に向かって「食べ物を、お金を」と訴えてくるのだ。守衛の方が鉄格子を閉めても、まだ動こうとしない。私はやるせない気持ちになり、目も耳も閉じてしまいたいような気がした。その場で物を与えることは簡単だ。しかしその子が大きくなるまでずっと与え続けることができない限り、それはその場だけの偽善行為でしかない。私はその男の子の目を見ていて、人間にとっての Basic Life の重要性を痛感した。住む家があり、毎日違う服を着て、お腹一杯にご飯を食べられる私達は、それがまるで当たり前のような感覚になっている。しかし全ての「発展」はまずそこから始まるのだということを改めて知った。



首都ヤンゴン郊外の村の様子

それとは反対に、ミャンマーの子ども達の生き生きとした目に出会うこともできた。首都ヤンゴンから少し車を走らせるとそこはまるで別世界。わらぶき屋根が建ち並び、人々は井戸と畑を行き来している。そんな集落に着くと多くの子ども達が私達を歓迎してくれた。各村にはＮＧＯなどの支援で建てられたコミュニティー施設があり、学校や教会としての機能を十分に果たしている。子ども達は3歳くらいの幼い子から12・3歳まで様々だ。ミャンマーの歌や踊りを懸命にプレゼントしてくれる彼らの顔は、本当に生き生きとした表情で、好奇心一杯な様子が伺えた。またミャンマーの識字率は「途上国」の中では極めて高い。（ミャンマー：79%，日本：99%）その原因はボランティア精神の高さにあり、大学生などは休みに入ると村々に読み書きを教えに行くと言う。このようなボランティア精神、子ども達の好奇心と意欲に満ちた目に出会うと、何か日本人には欠けがちな精神的「豊かさ」を持っている気がした。



目を輝かせた子ども達の表情（筆者：後列左から２人目）

いわゆる「発展途上国」「先進国」という言葉で形容されるように、日本とミャンマーでは社会状況も大きく異なる。違った社会の中で生活する私達の間には、当然ながら「発展」や「民主化」に対する概念も変わってくる。しかしそれは何をもって「発展」とみなすかの違いであり、決して経済発展だけが「発展」ではない。精神の面、秩序の面など多くの意味が含まれている。これら全てを合わせて私は「発展とは皆が豊かに人間らしく生きるためのもの」ととらえたい。そしてそう考えた場合、どんなに "Developed Country"

と呼ばれる日本であっても、やはりまだ多くの「発展」が必要であることに気付く。様々な社会問題と世界からの需要を抱える日本において、私達は新しい方向性を持った「発展」を目指さなければならない。

冒頭の文からも分かるように、ミャンマーの青年達はその「発展」において大いなる期待を受けている。私達日本の青年は、一体どれほど期待されているのだろうか。

(英文学科２回生)

『女 と 男』

辻 井 淳

聖書は、家庭・職場・教会という３つの組織で祝福を受け、恵まれるようにとすすめているが、私が関係している職場・教会は、まさに女性と男性の対話と協調の場所である。女学院は申すまでもないが、オーケストラ、特に弦楽器奏者はほとんど女性によって占められており、また教会も、婦人、青年女子によってその成長は大きく左右される。日本の女流バイオリニストの世界進出は著しく、彼女たちが実際魅力的な人たちで、生き生きと輝いているのである。それだけではない。音楽大学の状況は、男性がもともと少ない上に、プレーヤーとして自立するのは経済的な理由からかなり無理があるため、今に日本中の奏者から、男性プレーヤーが姿を消すのではないかと本気で考えてしまう。先日、「ジャパン・ヴィルトゥオーゾ・シンフォニー・オーケストラ」というところで仕事をする機会があったが、この「ヴィルトゥ……」はもともと「男らしさ・美徳」といった意味だそうだ。それでかどうかは知らないが、ここには数名の女性プレーヤーが参加していた。私としては、こういう所にこそ、女性に進出してもらいたいものだ、と思う。そしてプレーヤーとして残り少なくなりつつある男性陣と協調することのすばらしさを見いだしてほしい。とはいえ、私は今の仕事や教会に満足している。異なった世代の異性や同世代の女性と仕事をし、刺激しあうのは楽しいものだ。私の所属する教会は、幸い男女比のバランスもとれている。この祝福を神様に感謝したい。

(音楽学科専任講師)

『女 と 男』

飯 田 祐 子

ロバート・アルトマン監督の「プレタポルテ」という映画を見た。ファッションショーの開催中に起こるいろいろなドラマが、断続的に交互に繋がれている。２時間たっぷりと楽しんだのはお金も時間もかかった大がかりな遊びの風景で、何でもありといわんばかりの風通しの良さが印象として残った。何でもありの印象は登場してくる女と男の関係についても同様で、例えば、黒人男性と白人男性のゲイのカップルがあり、耽美趣味で女性的な(?)男と男性的な(?)女のカップルがあり、またそれが交差して別のゲイのカップルとヘテロのカップルになっていたりする。偶然の事情で同室になる女性記者と既婚の男性記者との関係は、体の関係も感情の関係もできて最後にはおきまりのドレスアップで男が驚く変身シーンもあるのだけれど、それでお終い、継続如何をめぐるいざこざは一切なし。ホットドックで窒息死するモード界の大御所の妻にはコミュニストだったおかげで離れ離れになった（十代で結婚した）夫がいて何十年ぶりかで再会するが、その時代劇的ドラマには幸せな結末も悲劇的な結末もなし、そのとき「女」を装う女と「男」を装う男がとてもかっこいいだけである。モデル姉妹と姉の夫の三角関係あり、三人の女雑誌編集長対売れっ子カメラマンの攻防あり。とにかく盛りだくさん、あるべき物語が切り捨てられていて、風通しが良い。大御所には愛人のデザイナーがいて、彼の死と彼女のショーの開催が物語の始めと終わりを区切っているが、長年の愛人を喪った彼女が、その切り捨てと０への積極的な帰還を方向付けていく。

こうした風通しの良さに触れるとほっとする。「女」と「男」を意味づける文化の物語の生産は依然執拗で、そのことを分析抽出する必要を感じる一方で、ときに息苦しくなる。「女」を装い「男」を装い「女」を外れ「男」を外れ遊び戯れることができたら、どんなに楽しいだろうとパラダイスを夢見る。けれど、こうして文化が一枚岩でないのと同様、一人の人間も一枚岩ではないし、それぞれのレベルを行ったり来たりしながら、やっぱり「女」と「男」の問題に関わっていきたいと思っている。

(総合文化学科研究助手)

1995年度前期活動報告

討論会　9月11日（月）

「女性学の成立をめぐって」：『女性学評論』9号（1995年3月発行）の特集テーマを中心に活発なディスカッションが行われた。

コーディネーター：

別府恵子氏（神戸女学院大学文学部英文学科教授）

パネラー：

浜下昌宏氏

（神戸女学院大学文学部総合文化学科教授）

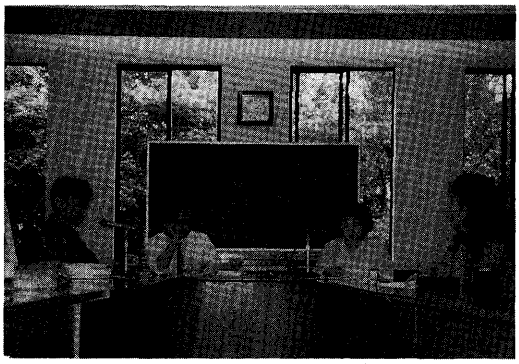
丸島令子氏

（神戸女学院大学人間科学部人間科学科助教授）

難波江和英氏

（神戸女学院大学文学部英文学科助教授）

［出席者：31名］



左より、難波江氏、浜下氏、丸島氏、別府氏

■ **AWI**（the Asian Women's Institute：アジア女性研究所）**交流プログラム：インド・パキスタン研修旅行について**

＊1995年度には、AWIが企画した国際交流プログラムにより、本学から学生1名（派遣学生の選考は1994年9～12月に実施）をインド・パキスタンに約1か月派遣する予定である。しかしながら、当初1995年3～4月にかけて実施の予定であった標記プログラムは、AWI側の事情により現在延期のままとなっている。

■ **AWI**（the Asian Women's Institute：アジア女性研究所）**学長会議について**

＊6月23日(金)から6月25日(日)まで、フィリピンのマニラにて標記会議が開催されたが、授業期間中であること、また震災の直後であることなどを考慮して、本学は残念ながら出席を見合わせた。

図書・資料をご利用ください

女性学インスティチュートでは、女性学関係の図書および資料の閲覧・貸出を、下記の要領で行っています。

◎開室時間　月～金　8：30～16：30
　但し、夏・冬期休業中の一定期間は閉室となります。

◎利用資格　本学教職員・学生・卒業生

◎蔵 書 数　図書　和書　約 1,500冊
　洋書　約　180冊
　その他、雑誌・新聞・ビデオ・講演会のテープ、女性団体のニュースレターおよびパンフレット

◎収集分野　心理・法律・労働・メディア・人権・フェミニズム理論・女性史・家族・ライフスタイル・性・からだ・環境・言語・文学・文芸批評

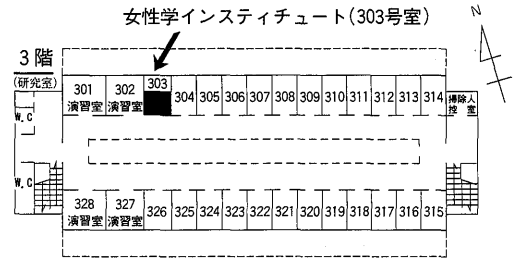
◎閲　　覧　開室時間中は自由にご覧ください。

◎貸出期間　2週間

◎貸出冊数　8冊まで

◎検索方法　図書目録カードBOXを当インスティチュートおよび図書館新館1階に設置しています。また、当インスティチュートではコンピューター検索も可能です。

女性学インスティチュート（303号室）



デフォレスト記念館（D館）

※　閲覧・貸出希望者は、デフォレスト記念館3階303号室（D-303）まで

1995年度女性学インスティチュート編集委員

別府恵子、原田園子、本城智子（委員長）、清水忠重、内田樹（ABC順）

編集・発行：神戸女学院大学女性学インスティチュート
〒662 西宮市岡田山4－1 ☎(0798)51-8545